記録

# 日田・中津に文教の史跡を訪う

（七月十八日・十九日 定例研修行事として）

（羽柴幹事記）

かねてより念願していた、日田と中津に教学の先覚者の跡を訪ね、文教都市の粂を見んものと計画した研修旅行、急に一週間繰上げ実施となった関係か参加会員意外に少く、定刻のバスに乗ったのは高木、高野、若杉、吉田、大良、深矢、上杉、小野、山本(伊)、羽柴の十名。少人数もよし、研修の実効を挙ぐるはむしろ少人数をよしとする平素の持論がむくむくと心中に湧き起るのを覚えた。

大分駅からは汽車、それも由布院で急行に乗りつぐという午前中の日程日田に着いたのが丁度正午。改札口には廣瀬恒太氏が待ち受けてくださる。まず何はともあれ腹ごしらえと駅前のきれいな食堂に入る。冷房が利いていて快適である。食後一息いれながら午後の日程を打ち合せる。

先ず第一は咸宜園の塾跡に残る唯一の建物「秋風庵」淡窓先生が起居なさっていた昔のままのお住居である（淡窓先生のお墓と共に国指定の史蹟である） 小川克己先生が咸宜園の教育について解説下さる。中島子玉や高野長英らの自署の入門簿（但し複写）を示され、全国から蝟集の青少年数千の塾生活、毎月行われていた月旦表（成績評価）など細々とお話し下さる。わが佐伯からは先ず明石大助ここを訪れ、その紹介により中島増(子玉)、古田蒙作入門し、特に子玉は数千の門弟中秀才第一としてその師淡窓に愛されていて、聞く私達も大いに意を強くしたものである。

秋風庵を出たところ、淡窓図書館の前に次の詩碑が建っている。言うまでもなく淡窓先生が、咸宜園教育を詠んだものである。

休道他郷多苦辛　同袍有友自相親

柴扉暁闢霜如雪　君汲川流我拾薪

（道うことを休めよ他郷苦辛多しと　同袍友有り自ら相親しむ　柴扉暁に闢けば霜雪の如し、君は川流を汲め我は薪を拾わん。）

私達は魚町の廣瀬宗家を訪ねた。即ち廣瀬代議士のお宅である。江戸時代のままの、然も広瀬家独得の雰囲気の漂うお宅で、一同はまっ直ぐに新築成った裏手の収蔵庫に導かれる。鉄筋コンクリート、防災、防虫、防湿等完全な収蔵庫である。淡窓先生の懐旧楼筆記や万善簿などの原本、月化、桃秋、旭荘、林外、青村等いわゆる廣瀬八賢の遺墨、遺品が整然と整理され、完全且つ永久に保存されている。これはまことにすばらしいことで、私はこれらは広瀬家そのもの、一広瀬家のほこりでなくて、日田市の、いや大分県の、いや日本のほこるべき教学の大集積である。これは江戸時代後期の家塾教育を伝える比類ない文化財であると思った。

さて次は日田代官による九州支配の跡を見んものと月隈公園に向ったのであったが、途中大雨となり、止みそうにもないので思い切って予定を変更して車で隈町平野五岳上人の専念寺に向かった。御院家平野一人師は浪太出身旧姓児玉、佐伯中学二十三回生である。法縁あつくして五岳上人の法燈を継がれておられるが、正直に言って私の五岳上人に対する知識は「大分県偉人伝」による程度で、理解きわめて薄いものであった。

私共は先ず庫裡の大広間に招ぜられ、一通りお話を伺って、五岳上人の書画を次々に拝見する。八十五歳の高令で亡くなられるまでに筆をとられた書画を愛蔵されている方がいかに多いことか。軸物が次々と掛けられてそれぞれお話がある。淡窓先生や竹田先生や、その他有名な方々の軸がいくらでもあり、私共その半分も消化しきれない。平野氏は広瀬淡窓先生の「亀山」の詩の色紙、「人間五岳」と題する五岳上人の評伝をみんなに下さる。ありがたい限りである。

[illegible]の晩年は専念寺内慈光楼で過された早川女謙吉と

方の話が出た。高等小学を出たままの学歴しか持たないが、氏は少時高等の教養をつまれた。隈竹山田家の出、志を立て安田銀行に入行、退職後日田にかえられ夫人を喪い、専念寺に身を寄せて静かな隠者の生活を行じた特異敬服すべき方である。詳細をつくすには紙幅がない。遺書、自伝、慈光楼の記の複写を廣瀬氏の御厚意で頂いている。簡単に製本、回覧にまわしている。一読をおすすめする。この早乙女氏のことは見学旅行の主題外であるが、私たちは"人間の生き方"について学び、深い感銘に打たれたのであった。

庭前、一段高いところに五岳上人の銅像があり、その背後に夏目漱石の句碑があった。（吉田氏の俳句を参照）

専念寺は五岳上人の関係、前記早乙女氏の遺托等により、数多くの書画、図書、骨董、什器等を所蔵され、宛も寺が小図書館、小博物館、文化財の収蔵所である。この見学を御世話下さった児玉、山本両氏、御案内の廣瀬氏、貴重な品々を次々と展示下さり御厚遇に預った当寺の千野師に厚く感謝するものである。

宿は三隈川畔の「千代の家」。夕食は広瀬氏、小川氏もお加わり頂いて遊船の上で。生憎午後三時頃の夕立で川水は泥んこに濁っていた。それでも鵜飼の船が訪れて来て、鵜匠さんから鵜の訓練や秩序正しい鵜の生態などを興味ぶかくきいた。廣瀬氏はテープレコーダーをもって日田民謡をきかせてくれ、小川氏は独得の健康体操を披露なさる。

第二日（十九日）、雨で昨日果せなかった廣瀬家の墓所に参拝した。淡窓先生のお墓をまん中にズラリと並んだ簡素荘厳なお墓に、一同は線香をささげ若杉師の読経にひとしお敬虔の念に打たれる。広瀬氏は墓前で一同の記念写真をとって下さる。（全員にカラー焼付の写真を送って下さった）

私達は広瀬氏に謝意をのべ、中津行きのバスに乗った。耶馬渓は守実温泉経由である。今回は観光は二の次であるので羅漢寺も青の洞門も下車なしで素通り、それでも車窓からながめる耶馬の山水はすばらしい。

バスは今日も正午ちょっと前中津駅前につく。先ず昼食ということで食堂に入り、一息入れて車で自性寺に向う。

自性寺は江戸時代の大家、池大雅の障壁画で有名、二部屋の四面一ぱいの書画。お寺の夫人の丁寧な解説もあり、大雅堂の筆力のすばらしさに魅せられる。ここの見学もよかった。

それから中津公園に出て「中津隊」「独立自尊」の碑を見て復元中津城に登る。奥平藩関係の古文書や文化財が陳列してあった。これはこれで郷土資料館として生かせる。しかし一般庶民生活につながる資料を並べるには不向きであろう。

福沢先生旧宅と資料館も見た。明治時代のこよなき先覚者福沢先生の教学精神は、今も尚活きていていると一しみじみ感じた。旧宅の方は佐伯市内に今も見ることの出来る下級士族の邸宅と同様。裏手の土蔵は少年諭吉が勉強に使っていたものであるという。

少々くたびれたが全員元気に午後四時半すぎ下り急行便で大分に、そして一部の者はバスに乗りかえて佐伯に帰った。

終りに一行中の吉田長良子の俳句をお目にかけよう。

雲を吐く夏山由布の二タ尖り
擲入れしごと杉山の夏容（かたち）
竹落葉昔もかくや咸宜園
吾（あ）も侍（はべ）る淡窓旧居夏座敷
濁流となりし夕立（ゆだち）の三隈川
つれあいのなき鵜もありぬ鵜飼舟
八尺の五岳の像や夕立中（ゆだちなか）
漱石の風の句碑五岳像
大雅堂出でて寺苑の花木槿（はなむくげ）
自性寺の木陰にたつみ句碑太き

（おわり）